

定例研究会要旨

日時：平成 21 (2009) 年 6 月 10 日 18:40～20:40

会場：東京外国語大学 語学研究所

題目：「願望の言語学：現代ドイツ語の不定詞と接続法をめぐって」

発表者：藤縄 康弘（東京外国語大学大学院総合国際学研究院准教授/ドイツ語学）

1. はじめに

現代ドイツ語は SOV を基本語順としながらも、V が定形で、かつ補文化詞が存在しない限り、V は任意の第 1 文成分の直後へ移動を余儀なくされる。その結果、SVO や (X)VSO などの定形第 2 位 (V2) の語順が実現する。このような条件で V2 が起こることは、英語を除く現代ゲルマン語に共通する性質であり、記述的事実としては極めて明解である。しかし、どうして補文化詞の有無と定形動詞の位置が相関することになるのかについては、いまだ十分な説明が得られていない。

他方、動詞の定性や補文化詞といった要因が直接関与する現象としては、補文が挙げられる。その際、上述の現状に鑑みるなら、補文の研究は、単にどのような述語の下にどのような種類の補文が現れるのか、整理するだけでは不十分であろう。さまざまな補文の表現がどうしてそのように分布するのかについても、一定の見通しを示すことが求められる。

2. 類型論の観点で見たドイツ語の補文

世界の言語の補文現象を概観した Noonan (1985) によれば、補文は、主文とどの程度、統語的・形態的特徴を共有するかで段階づけられるが、そのうち主文との共通性が少ない類の補文は、談話的には非断定的、認識論的には非現実的、時間的には主節の時間に依存した環境に生起するとされる。

ドイツ語では、主文との統語的・形態的共通性が高い補文として直説法の補文 (V2 または非 V2) がある一方、接続法の補文 (V2 または非 V2) や不定詞 (必ず非 V2) は多かれ少なかれ主文の性質を失っている。ところが、こうした主文性の低い補文の表現は、Noonan の予見するような非断定的・非現実的・依存時間指示的な環境に留まらず、断定的・現実的・独立時間指示的な環境にも広く生起する。例えば、接続法の補文は本来期待される「願望」の述語 (英語で例示すれば *want, wish, ...*) のほか、「発言」や「意思表明」の述語 (*say, tell, think, ...*) の下にも現れる。その際、「願望」の述

語下では必ず V2 が選ばれるのに対し、「発言」や「意思表示」では V2・非 V2 間の機能的対立は解消する。また不定詞は、本来期待される「願望」、「使役的操作」(cause, force, order, ...), 「モダリティ・達成」(can, should, try, ...), 「局面」(begin, stop, ...) といった述語の域を超え、「知識」(know, ...) を除く、ほとんどどんな述語の下にも可能である。

接続法の補文と不定詞のこうした特異な分布は、ある程度まで普遍論的な道具立て(含意的階層性、文法化)で説明がつくとはいえず、例えば非現実的なはずの不定詞が、事実の「評価」(regret, be sorry, ...) を示す述語下にも生起することは説明が難しい。

3. 願望からの展望

ここで冒頭の問題を思い起こせば、「願望」の補文にこそ、V2 現象の本質が現れているのが興味深い。すなわち、定形動詞の位置と補文化詞の有無が機能上明確に対立しているのは、唯一「願望」の述語の下なのである：

表 1：願望における補文形式の対立

	自ら叶える	他者が叶える
実現可能	不定詞	直説法の dass 文 (非 V2)
実現不可能	接続法の V2 文	

ところで、非現実の事柄の実現を望む「願望」は、その事柄が事実でないという認識の裏返しである。こうした願望を背景にした事実認識は、意思表示の述語の(1)や(2)のような使い方に表れている。その際、(2)では補文に(1)の補文命題の否定が来るが、これは事実なので、直説法の補文で示される。他方、こうした事実を否定する意思表示のほうは、現実に反する態度ゆえ接続法で示すというのがドイツ語の流儀である：

- (1) Ich *dachte*, sie **wäre** verheiratet. 「彼女は結婚していると思っていた」
I.NOM think.PAST.IND she.NOM be.SUBJ2 married
- (2) Ich *hätte nie gedacht*, dass sie unverheiratet **ist**. 「未婚だとは思わなかった」
I.NOM think.PERF.SUBJ2 never that she.NOM unmarried be.PRES.IND

このように、V2 の接続法と非 V2 の直説法とで示される補文の差異は、純粋に理性的な知に基づく事実性の反映ではなく、知が願望と表裏一体の関係をなすことを踏まえて初めて体系的に理解され得るものである。その意味で、「デカルト派言語学」では不十分なのであり、文法研究が根本的な深化を遂げるには、むしろ願望のような「情」を適切に考慮することが重要性を持つのではないかと思われるのである。